

24 三國史記、高句麗本紀、後魏書、卷一〇〇、高句麗傳、好大王碑文、等參照。

25 三國史記、新羅本紀、三國遺事卷一、赫居世の出生の條、唐書、

卷三三二、下、隋傳傳。Wallis Budge, Osiris and the Egyptian Resurrection, p. 369. 等々參照。

26 史記三皇本紀は唐の司馬貞の補したるものであるが、其の註に、按伏羲風姓出國語、其華胥已下出帝王世紀などあるのを見ると古文獻を參照したものであることは明らかであらう。

27 山海經 卷一三、に引用せられたる河圖の文には、大跡在雷澤、華胥履之而生伏羲、とある、詩緯含神霧の文と殆ど同様であつて、只、出、在の字及び、宓犧と伏羲の字が異なつてゐるのみである、

28 淮南子卷一九に見える高誘の註に、堯母慶都、蓋天帝之女、寄伊長孺家、年二十無夫、出觀於河、有二赤龍、負圖而至曰、赤龍受天下之圖、有人赤衣光面、八彩鬣頰長、赤帝起成三元寶、奄照陰雲、赤龍與慶都合而生堯、視如圖、故眉有八彩之色、洞達聖道也、無私無所愛憎也、

29 此の天帝に接觸するといふことを考察するに至つて、自分は古代支那人の間に於いては天を情意を有する人間的な神として取り扱つた點がありやしないかと思惟するのである。

30 那珂通世氏譯、成吉思汗實錄、卷一、一二頁。

31 現存の後魏書には缺けてゐるが、斐松之が三國志の東夷傳に註したる後魏書の鮮卑傳に據る。

敦煌古書雜考

石濱純太郎

一 漢書蔡謨集解

羅叔言先生校刊の敦煌石室碎金乙丑五月東方學會印に漢書匡

衡張禹孔光列傳殘卷を校録してゐるが、只排印せる原文のみで別に識語も跋尾も附せられてはゐないから、所藏者も殘卷のどんなものかもよく分らない。

然し民宇治字の闕筆も見える様だし、或は立派な精鈔本かとも想像して見る。

原文には附注が存する。文穎蘇林晉灼如惇服虔等の諸注を引いてゐるが、顔師古には及んでゐない。

且又その引かれたる諸注は顔注所引と大同乍ら相異がある。例へば匡衡傳の「因賜上尊酒養牛」の下に

律一斗稻米得一斗酒爲上尊酒一斗稷米得一斗酒

爲中尊酒一斗粟米得一斗酒爲下尊酒

と誰氏曰の無い注があるが、顔注本（王先謙補注本による）では只「師古曰上尊解在薛廣德傳」とあるのみだ。因にこゝに薛廣德とあるは平當の誤で一時の失檢である。平當傳の「上尊酒十石」の顔注には

如瀉曰律稻米一斗得酒一斗爲上尊稷米一斗得酒

一斗爲中尊粟米一斗得酒一斗爲下尊師古曰稷即

粟也中尊者宜爲黍米不當言稷且作酒自有澆醇之

異爲上中下耳非必繫之米

と注してあつて如顔異說である。而して此本の注は同じく漢律を引いて文に異同はあるが如と同說である。又同じく匡衡傳中の「衡封臨淮郡」の下には

蘇林曰平陵閩僮縣千陌名也平陵陌在閩陌而誤十

餘歲衡乃始封此鄉也晉灼曰舉郡而言耳自封縣也

とあるが、顔注は

蘇林曰平陵陌在閩陌南誤十餘歲衡乃始封此鄉

とあつて蘇說を上畧し晋注を全刪してゐる。

又同傳の「賜以爲舉計令郡實之」の下には

如淳曰若今校課第

の注があるが、顔注は如注を引かずして、

師古曰舉發上計之簿令郡故從平陵陌以爲定實

と自注を述べてゐる。又張禹傳の「肥牛亭部處地」に

は

文穎曰肥牛地名也

とあるが顔本は

師古曰肥牛亭名欲得置亭處之地爲冢塋

と換えてゐる。又孔光傳中の「徙名數子長安」の注は

服虔曰徒籍也案名人名數口數

であるが顔本は

師古曰名數戶籍也

と片付けてゐる。因に張禹傳の「常擇日製齋露著」の

注

露筮易著於星宿下明日乃用言得天氣

は顔本には「服虔曰」として同文を引いてゐる。これ

は或は此本が此三字を首に誤脱したのかも知れな

い。よつて考ふるに此本は固より顏師古注本でなく、却つて顏氏が依つた舊集注本だと見られる。顏師古以前の漢書舊集注本は師古の叙例に據ると、晋灼・臣瓚・蔡謨の三書がある。然し既に錢大昕が叙例に據つて「據此知不獨服應音義單行即灼瓚兩家亦不注文之下至謨乃取瓚書散入正文是漢書注本始於東晉顏注蓋依蔡本而稍采它書附益之」（王氏補注引く所に據る）と指摘せる如く灼瓚兩家は音義の輯本であつて蔡謨本のみが正文附注本である。果して然りとせば此殘卷本を蔡謨の集解と定めて當に疑無かるべきだ。而して顏君は叙例にて「蔡謨全取臣瓚一部散入漢書自此以來始有注本但意浮功淺不加隱括屬輯乖舛錯亂實多或迺離析本文隔其辭句穿鑿妄起職此之由與未注之前大不同矣謨亦有兩三處錯意然於學者竟無弘益」と大に詆つてはゐるが、却つて錢大昕の慧眼既に看破せる如く實は蔡本を主として稍々補益刪訂したものに過ぎないのではないか。

蔡謨は晉書卷七十七にその傳があつて、已に「總應劭以來注班固漢書者爲之集解」と出てはゐるが、たゞそれ丈でよく分らない。隋書經籍志以下皆其名を著録してゐない。然し顏君の叙例を見ると臣瓚の漢書集解音義を後人の見る者臣瓚の作る所とは知らないで乃ち之を應劭等の集解と謂つてゐるが斯れ審にせざるからであると説いてゐるが、その通り隋志も唐志も皆應劭撰として出てゐるのだ。所がこゝに又隋志に

漢書一百一十五卷漢護軍班固撰本
山太守應劭集解

と云ふのがある。この應劭集解と云ふものも前述の如く臣瓚集解の誤に違ひない。然し臣瓚の集解は二十四卷であつて正文に附せない本である筈だから百十五卷本ではない。所で顏君叙例によれば「蔡謨全取臣瓚一部散入漢書自此以來始有注本」とあるから、この隋志の百十五卷の集解本は全く蔡謨の集解本と定めるべきであらう。章宗源の隋志考證（三十三種

叢書重刊本）卷一なんかは「今存顏師古注本較應劭本多五卷唐志兩本並存而脫應劭集解四字」と注して、二十四卷本の所は「唐志同」とある丈で、顏君叙例すら參考してゐないが、若しその云ふ如く唐志の百十五卷本の下に四字を脱してゐるとすればこれ亦蔡謨本を著録したと見るべきだ。

蔡謨の集解は早くからかく誤られ、顔注出で、一尊に定つてからは漸く散佚に歸したものらしい。わたくしは嘗て群書治要抄載の漢書注を研究して、その顔注本に非ずして蔡解本なるを知り、昨年秋京都の史學研究會に於て大方の教正を請ふたが、何れ別に其考を録して世に問ひたいと思ふ。治要本は抄録本であるが、この敦煌本は斷卷とは云へ原本の面影を傳へた珍物であるから、彼此參見すれば蔡解本を彷彿し得て蔡顏兩注本の異同得失も檢定し得るに至らうか。

以上専ら此本の注文を論じたのみであるが、正文

の今本との異同校勘等に關しては今姑く之を實く。

二 老子成玄英義疏

伯希和敦煌蒐集 No. 2817 の老子道德經義疏卷五殘卷を伯希和先生は早く之を梁の簡文帝の講疏かとせられた事（通報第拾參卷四〇三頁注）があつた。羅叔言先生は鳴沙石室古籍叢殘中に景印本を收載して之に跋して孟智周の疏と定められた。後わたくしは劉幹始が道藏信字號本の所謂顧歡の註疏を嘉業堂叢書中に刻した（之を涵芬樓の道藏影印本第四百零四—六冊と對校して見ると矢張り小異を存する）ものを讀んで、同書に只疏とのみ標して引けるものの敦煌本義疏と正に合するを支那學第壹卷第拾壹號に指摘して置いた。又其後わたくしは道藏中の老子注諸本を檢索して敦煌本は正しく成玄英疏なるを定め得た。又その後馬夷初教授の老子叢話を得て讀んで、

教授が已に敦煌本も又道藏本の引く疏も成疏とせるを(麤話の稱經及篇章考及び引用書目を見よ)知つて喜んだ。但し馬教授の引用書目に題せる所では如何にも道藏信字號本を成疏と定めた様に見える。河上公章句本とも成義疏本とも云へない。矢張り今は某氏の集解とするより致し方あるまい。

成玄英の老子義疏は已に佚して道藏も亦之を收めてゐないが、幸ひ茲に使可覆の三字號に涉つてゐる強思齊の道德真經玄德纂疏二十卷(涵芬樓景印道藏第四百零七—十三冊)が存する。これは老子の玄宗の御注・御疏・河上公・嚴君平・李榮の三注及び成玄英疏の六本を纂輯せる會本とも云ふべきもので、卷首には道德經廣聖義の著者杜光庭の乾德二年の序を有する。李杰の道藏目錄詳註(この書に就いては冊府第四卷第二號を見よ)卷之三には本書に注して、最初の使字號の下には強思齊纂として誤らないが、可覆兩字號の下では「唐明皇河上公嚴君平成玄英李榮

強思齊六家註疏」としてゐるが、強をいれて六家とは粗略極まる。強思齊は注も疏もないので只六本を會纂せるに止まる。Dr. Léon Wiegner S. J. の佛譯道藏目錄(Taïsiang, Tome I Bibliographie générale, 1911)の一二七頁の第七百零五番は玄德纂疏だが注して「Synthèse des Commentaires 676, 687, et 711」としてゐるが、伯希和教授の云ふ如く(通報第拾參卷三八七頁注)不完全であり且誤植もあるらしい。676 は河上公注、687 は嚴遵の指歸だが、711 は王守正の衍義手鈔だから誤植に相違ない。又河上公嚴遵の單注本を出すなら玄宗の御疏(數字號 673 が足本である。才字號 673 は後人の抄録本に過ぎぬ)や李榮の注(絲字號 716 の註と云ふのが唐の李榮の殘卷である。715 の解義と題するものと混する勿れ。又それも道藏本によると義解とすべきだ。李榮注は敦煌本がある)も出さねばならぬ。又李氏の目錄詳註にも隨つて佛譯目錄にも玄宗御注を脱落してゐる

が、男字號には玄宗の御注が存在してゐる（涵芬樓本男下第三百五五冊）のだ。單注本で道藏に存しないのは成疏のみである。そこで此玄德纂疏所引の成疏を以て敦煌本義疏に對校すると正しく合するのみならず、且は纂疏が會本として殆んど刪省する所無く章題下の分科釋疏も成法師の文なる事を發見する。乃ち纂疏の引文を抄出して敦煌本の體裁に案配すれば、成法師の老子本文の疏は殆んど原形に復し得るものなるを知る。

成玄英の老子注二卷と云ふもが舊唐書藝文志に出てゐて、新唐志になると注二卷の外に又開題序訣義疏七卷と注疏兩本になつてゐる。宋史藝文志には疏丈が出てゐるが、鄭樵の通志・焦竑の經籍志には兩方共出てゐる。勿論焦竑なんかはその著の老子翼漢文大系の采摭書目を見ると大抵道藏所收計りで成玄英の名も出てゐないから、或は前人の著録を其儘に寫したものに過ぎないだらう。成法師は或は注疏兩本

を撰したのかも知れないが、杜光庭の廣聖義景印道藏本によるの序（蓋上第四百四十冊）には哲后明君鴻儒領學の詮疏箋註六十餘家を列記してゐる「成玄英作講疏」と擧げて別に注本あるを記してゐない。或は注はなくて疏だけなのを誤傳混雜したのでないか知らん。伯希和先生は疏は開題序訣だけの義疏と見られたらしいが（通報第拾參卷三八七頁）、敦煌本が成疏と定まつた以上はいかぬ。疏も六卷七卷の差があるが、今の敦煌本では卷尾に「卷第五」とある以上は、五卷本と定むべきか。或は本文の疏が五卷で開題・序訣の疏文が合して一卷開いて二卷あつて、それを合して六七卷としたのではあるまいか。玄德纂疏の開卷の初めに「此經是三教之冠冕云々」と始まる文字があるが、それは直ぐ章題分科の疏文に連結する所を見ると成疏の文なる事が看取される。その内に此經の題して道德と稱する所以を説いて「其委曲玄旨具在開題義中」と云つてゐるから開題なるものの存する事を知

れる。又杜光庭の廣聖義卷五に「今按河上公授漢文帝上下二經章句謂帝曰余注是經以來千七百餘年凡傳三人連子四矣勿示非其人成玄英法師解曰傳三人者務

光義門子高丘子是也」とあるが、この河上公云々の

文は即ち左仙公葛玄の序訣（左仙公の序訣は諸書に見えるが、王雱の道德直經集註の卷首景印本卷上第一 三百九十五冊に

載せたるものが具備してゐる方だが、猶最後にある

べき太上隱訣を闕いてゐる。これがあるので序訣と

云ふのであらう。而して又これがあるので玄奘三藏

が「叩齒咽液之序」と詆譏した佛道論衡 丙之第十ものだ。老子の

敦煌諸本を參見すれば序訣はよく分る）に據つたも

ので、成法師の解とは序訣の疏文に外ならぬ。又玄

奘の甄正論卷下類伽精舍校刊大藏經經錄第八冊に「道士成玄英撰老經

疏云河上公在陝州城南三里」と引いてゐる（伯希和教

授が已に之を指摘して通報第拾參卷三八七頁）が、これ亦序

訣の疏文である。これ等の例を以てして成疏は卷首

に開題があり次に序訣の釋疏があつて本文に入る事

を知り得る。だから五卷以外に六七卷と云ふ説を立て、開題序訣一兩卷開合の差をその釋明としても餘り不當ではなさそうた。

成疏の佚したのは宋元の交であらうか。范應元（南

華真經義海纂微の著者褚伯秀の師なる事は義海纂微

の末卷に伯秀自ら明記してゐる。沈乙齋等の跋尾を

補ふに足る）の古本集註は之を引いてゐるが、道德

真經集義（道藏染詩讀字號）を編集した元の劉惟永は

成玄英は范應元の引く所に係ると集義大旨圖序卷上

（景印本梁上第四百三十一冊）で謂つてゐる。

成法師に就いては伯希和先生が集古今佛道論衡

類伽藏 經錄七の卷丙の中なる「文帝詔令英法師翻老子爲梵

文事第十」藝文第十七年第四號の松本文三郎博士の

「玄奘の著譯書に就いて」中の第三項はこれを取扱つ

てゐられるが少しも伯希和譯注に及ばれなかつた。

又論衡の小題に關して宋元明本との異を挙げられた

が、各卷首目錄の題と本文初めの題とに相異なる事

にも及ばれなかつた。同誌二四頁注一〇を見よ)の譯注を試みた時 (Autour d'une traduction sanscritte

du Tao To King, Young Pao, Vol. XIII, p. 351-)

文中の成英を以て成玄英なりと斷じて注中三三六頁に註の二

法師に關する俟聞をよく輯めてゐる。固より成英は

成玄英であらう。新唐志に依ると成玄英は貞觀五年

召されて京師に至り永徽中に郁州に流されたとあ

る。何の原因で流されたか詳かではないが、吉州の

三皇經案(佛道論衡内の第九及び佛祖歷代通載卷第

七類伽藏致十、固より伯希和先生の成武英成玄英説を肯定してゐるを参照)や又老子翻譯

の節玄奘相手に成績不良なりし事なども因縁してゐ

ると考えるのも一興だらう。ともあれ此疏を叔言先

生定めて高宗の時の寫本と爲すが、若し果して然り

とすれば撰著の時を去る甚だ遠からざるものであつ

て、敦煌諸本中에서도極めて珍重すべきものであら

う。

三 俱舍論安慧實義疏

羽田亨博士は白鳥博士還曆記念東洋史論叢に「回

鶻譯本安慧の俱舍論實義疏」の一文を寄せて、スタ

イン蒐集の回鶻本とペリオ蒐集の漢本(No. 3196)と

を詳細に論じられた。抜刷を贈られて讀過したるし

るしとしてこゝに數語を留めて置きたい。

回鶻本は鴛淵教授將來の大英博物館スタイン蒐集

目錄題してソド・ウイグル文目錄としてあるが實は西藏文も梵文も見ゆる様だによると

Or. 8212 (75)

A work on Buddhist doctrine, in Uighur, with

chinese rubrics, 2 vols, written on rice paper in

the manner of chinese Mss. (ch. XIX. 001, 002.)

となつて、新番號では一つになつてゐる。末尾のが

舊番號である。Or. 8212 全部はスタイン蒐集のもの

である。

漢譯本は近く大正新修大藏經第二十九卷毘曇部四

に收められて出たので、見るを得て甚だ善ばしい次第であるが、頗る案外なものであつたのは遺憾である。然し「所詮會て行はれた安慧の實義疏の名と巻首の歸敬の偈とをこの俱舍論の抄の如きものに前付したに過ぎぬのであらう」と迄云はないで、無識の者が安慧の疏を寫してメッタヤタラに省略抄出したもので、「釋曰」は安慧釋のその殘遺と見てはいけないだらうか。敦煌蒐集中には固より他にもこんな風のわけの分り難い寫本の例はある様に思ふ。同鵝本研究の爲めの最も重要な資料たるべきものが、このものであつたのは如何にも残念である。敦煌蒐集中から斷簡なりとも眞本を探し出したものだ。

一體俱舍の研究はビュルヌウフ以來諸學者の懸案とも云ふべきものであつたが、この同鵝本の出現が機縁となつて、各國學者が共同して一の俱舍聯盟を結ぶに至つたのは不思議の因縁で極めて喜ばしい。委細は下に引く蕃梵論疏の兩本に冠せる Prof. Wase-

hatsuki の英露兩序中に詳かである。而して先づ諸原本諸譯本校刊の九つの分擔プランを立て、既に Bibliotheca Buddhica XX には蕃藏の Karikah 及び Bhisyan の、XXI には梵本稱友疏 Sphutartha (兩三年前泉芳環教授が本疏の南條笠原兩師手寫本を青寫真に副製して有志に頒れたのは感謝すべき事であつた) の校刊本を出し始め、又プサン教授の世親頌論佛譯も毎年世に送り出されつゝ、(プサン佛譯本に就いては佛敎研究第六卷第一號に紹介がある) である。然し既に稱友の釋論梵本の出版に及ぶ以上は尙ほ丹珠爾に收めらるゝ衆賢・稱友・圖增・寂天・陳那及び安慧等の諸疏と題せらるゝもの (Catalogue du fonds tibétain de la bibliothèque nationale par P. Cordier, Troisième partie, Index du bstan-igyun. p. 394-8 et p. 499) に對しても何れ校刊研究の手が及ぶと見て宜しからう。

已に羽田教授は後記に於て丹珠爾の安慧釋に及ん

四 大乘無量壽宗要經

京都のニコライ・ペトロウィツチ・福田精齋君が亡夫人亡令息の記念として「西藏古寫經」と題する敦煌本藏文無量壽宗要經を影印出刊せられ、わたくしは一本を贈らるゝの幸榮に接した。所で恐縮したのはわたくしの當時匆々に書いた古毛紙が附印せられて居た事である。そこで其後とても本經を特に研究したのでは無いが、本經に關して知る所の粗雑な見聞を略記して福田君の盛意に酬ひやうと思ふ。

彙文堂に出た本經は元一卷中に幾部も連接してあつた長卷のものだつたと聞いてゐる。わたくしも幸ひ二三部連續の部分を得て藏してゐる。尙ほ同じく此兄弟であるべきものが京都には三四ある筈である。スタイン蒐集中には此藏譯本は數本であるのべ Serindia. Vol. IV. Plate CLXXIII には寫真で片影を示して Serindia. Vol. III. p. 1470 (參照) である。

本經は元から梵文本も知れて居たが、スタイン敦煌蒐集中に于闐文がある(同上第三卷一四七〇頁)事が知れてから急に種々原文が校刊された。即ち Steen Konow 教授はその于闐文に梵文本と藏文本の敦煌本二種と甘珠爾本とを對校したものと英譯文とを一緒にして校刊を了へた (Manuscript remains of Buddhist literature found in Eastern Turkestan edited by A. F. Rudolf Hoernle. Vol. I. p. 289-)。我國の池田澄達學士は梵文四本を對校して漢本法天譯大乘聖無量壽決定光明王如來陀羅尼經^{縮藏成}と西藏本とを參照して一梵文定本を宗教研究第一卷第三號に「梵本アバリミターユル陀羅尼經の校合」として發表した。邦譯も付いてゐるが苦心の校勘記を出さないのは遺憾だ。又獨乙では Max Valleser 教授は夙に本經于闐文發見の豫報を見るや早速參考にと尼波羅梵本に藏本(甘珠爾本か)と梵本及び漢譯本(法天本)の獨逸譯を添えて刊行した (Aparimitayur-jhāna-nāma-nah-

ryän-sütram. Sitzungsberichte der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-historische Klasse, Jahrgang 1916, 12. Abhandlung)。池田學士もワレザア教授も漢譯本は皆大藏中の法天譯本を使用してゐたのだが、こゝに又敦煌本中に無量壽を要經と名付けられた譯者不詳の漢譯本が無數にとの蒐集中にも出て來た。松本博士の研究(佛典の研究に收められた燉煌石室古寫經の研究、一五八頁)矢吹慶輝博士の目錄(シュタイン氏蒐集燉煌地方出古寫佛典ロートグラフ目錄、宗教研究第二卷第五號一七二頁)にも解説せられ、殊に于闐文西藏文には法天本よりよく合すると云ふ。大正新脩大藏經には編入される筈だから参照に便利になる。尚ほ此外に回鶻譯本もあつたらしう。F. W. K. Müller 博士の *Uigurica* II 五一頁の注に引く所によると西藏文から譯したらしい回鶻本の卷首題名がある。これ丈でも回鶻譯本の存在したことを推定しても差支無からう

かなり澤山の本があるが、こゝに注意すべき事がある様だ。先づ本經の甘珠爾本に二種ある(Alexander Osoma Kōrosi, Analysis of the Sher-Chin, P'hal-Ch'ien, Dkon-sāks, Do-dé, Nyāng-dās, and Gynt. p. 531-2. Léon Feer, Analyse du Kandjour. Annales du Musée Guimet. Tome 2. tome p. 329-30. Hermann Beckh, Verzeichnis der tibetischen Handschriften, erste Abteilung: Kanjur. Die Handschriften-verzeichnisse der Königlichen Bibliothek zu Berlin. 24. star Band. S. 122)。其間の異同の程度を詳かにしなうが、二種並んであるから少しでも廣略があらうと思はれる。又ステン・コノフ教授の藏文校刊本で見ると敦煌本間の差は極めて少いが(福田氏の景印本はどちらかと強ひて云へばコノフ博士の云ふ¹⁾に近う様だ)、甘珠爾本とは脱衍の差がある。漢譯本も勿論法天本と敦煌本と差はあるが、又敦煌本にも二種あるかして、矢吹博士の解説目錄には「大略二種の譯

本あるを知れり」とある。所が梵本にも二種に區別が出来て藏文は又別種とステン・コノフ教授は云ふ。わたくしは自分手近かの材料さへも比較研究してゐないから、これ以上何も知らない。然しかく諸本皆大體二種に別れると云へば、その間に何等かの關係があるのか、單に別生派出に止るのか疑はしくなつて來る。誠にコノフ教授の云ふ如く *dull text* とは云へ諸本分別の比較研究を面倒でも將來に誰かに期待したくなつてくる。

さて又甘珠爾の康熙板目錄（内藤湖南先生が明治三十八年奉天で移寫將來せられたものによる）に依ると、漢名は聖者無量壽智經及び聖者無量壽智大乘經と題してある。さうすると秘殿珠林卷二十四の供奉經典目錄に素・紅・藍・磁青等の諸箋に泥金書の西域字或は滿洲字蒙古字の無量壽智經凡て百五十六本を列記してゐるのは正しく本經の事であつて、先づ甘珠爾本と同じものだらうと思はれる。こゝに西域

字とあるのは疑無く西藏字を指して謂ふのだ。こんなに澤山著録されてゐるとは驚く。何しろ經文の功德書寫の功德を讚歎する本經の事だからかく何の時代でも又到る處でも尊崇せられたものであらう。だからこそ一軸中にも同じ經を幾つも幾つも寫し込んだもの迄あるんだあらう。

佛國耶蘇會士の支那渡來事情

後藤末雄

一 序 說

十五世紀の末葉に葡萄牙人が東印度の航路を發見するに至つた動機は、全く土耳其のコンスタンチノブル侵入によつて杜絶した東西の通商を復活して、アラビヤ人の仲介を待たずに、東洋貿易を開始